

なく、大循環についてもデータがうまく使われていない(増田), メジャーとモデラーの関わりをうまくしていかなければならない(早坂), 個人レベル(それが実行者でなくてもよい)で立案し, 委員会を経て計画を煮つめて極研との話し合いをもって欲しい(和田). 気象界では専門のシェアリングがいき届いていて南極事業もその一例である. しかし新しい研究分野が出現し研究交流が進むにつれて, これが見直される時期に来ているかもしれない(遠藤). などである.

[学会の役割について] 気象学会には熱帯気象グループがあるがそのなかに熱帯観測者は全くいない. これに対して南極気象では極地研, 観測屋ばかりである. そろそろ気象学会内部に極地気象グループ又はセッションをつくってはどうか, そこで極地気象に興味を示すような働きかけをする. そのためにはこの月例会は止めてもよい. また現在のセッションの分け方にも問題が

ある(安成)などの提案がなされた. これに対して, セッションと月例会は別のことで, 月例会にはインフォーマルという重要な意味がある(大畑), 南極セッションを今もち出すと, 同じ内容なら境界層や放射のセッションに付けられるだろう. これには分科会や講演企画委などからなるワーキンググループが要る(増田)などであった.

[その他] 気象, 気象というのは止めようではないか, 気象といわなければもっと別の角度で何かができるのではないかと, 他学会との交流も深め, 気象学会や極研を大いに活用するようにしたい(岩坂), 南極問題は境界問題であるので, そのとおりである(安成), Post ACR を見越した新しい企画を出していこう(和田), たとえば海水と大循環のモデラーの意志の疎通を計っていききたい(滝沢), などが挙げられた.

大型レーダー国際学校開催のお知らせ

名称: 大型レーダー国際学校
主催: 京都大学超高層電波研究センター
後援: 太陽地球間物理学特別委員会, 国際電波科学連合, 地球電磁気・地球惑星圏学会, 日本気象学会

会期: 昭和63年11月24~28日(5日間)

場所: 京都市(烏丸京都ホテル)

開催目的及び学術的意義: 近年, 大型レーダーは大気科学の研究に大変有力な手段となりつつある. 同種レーダーは既に世界各地で稼働, 或いは建設中である. 大型レーダーネットワークを構築し, 得られたデータを気象予報データとして用いようとする試みもなされている.

ISAR の目的は新たにこうした分野に入りたいと考えている科学者や開発途上国の若手研究者に国際的な学習の場を提供しようとするものである. 其界の研究者が以下のような講義を行うことになっている. いず

れも十分な質疑時間を設け受講者の理解が深まることを予定している.

——講義内容——

- I. 大型レーダーとレーダー大気物理学の歴史
- II. 大型レーダー技術
 - (a) レーダー技術概論
 - (b) レーダーの制御とハードウェア
 - (c) データ取得及び処理
 - (d) スペクトル及び相関解析
 - (e) 大気パラメータ推定
 - (f) データ評価と解析
- III. 理論, 実際及び応用
 - (a) 下層及び中層大気
 - (b) 気象学への応用
 - (c) 電離圏大気
- IV. 討論及び結論